

## 不思議な島の物語

とんだ玉三郎

和田修は外資系IT企業でプログラマーとして働いている。大学の探検部で知り合った美沙とは結婚したばかりだった。美沙はネイルサロンで、爪に装飾を施したり爪をケアする仕事をしていた。修は趣味で株式投資をこつこつやっている。最近の政府の意図的に株価をつり上げる金融政策のお陰もあって大儲けをし、いわゆる「億り人」と言われる金持ちとなった。

修は妻に自分の計画を打ち明けた。

「南の島に移住しないか。こんなせせこましい日本にいたことはないよ」

「急に何を言い出すの」

「俺は島で育った。島の自然は、とても魅力的だ。年をとったら仕事をやめて移住したいと前に言っただろう」

「大儲けしたので遊んで暮らす気なの」

「仕事は続けていくつもりだ。面白いからな」

「まさか、そんなところにプログラマーの仕事なんかないでしょ」

「今の会社でさ」

「どうやって？」

「リモートワークさ。俺の職場でそんな奴、いくらでもいるよ。皆、お互いどこで仕事しているか知らないくらいだ。会社だって出社しない奴が多ければオフィスも縮小できるし大歓迎さ。六本木のビルの賃貸料はバカにならないからな」

「リモートワークって、パソコンなんかちゃんと繋がるの」

「島のような辺鄙な所でもリモートワークしている奴もたくさんいるよ。通信環境は大丈夫だろう。もし、不十分なら、投資して整備するさ。そのくらいの金はあるよ」

「でも、私は今の仕事を続けたいわ。島なんかに行ったらネイルサロンなどないでしょ。勤め先がなくなるわ」

「大丈夫、ちゃんと考えてある。株を少し売れば店くらい簡単に出来るだろう」  
「お客さんが来るのかしら」

「目をつけているのはパラダイス島さ。日本人観光客の穴場だ。日本から飛行機で四時間だ。観光客相手に店を出せばいいんだよ。韓国なんかからも来るらしいからね」

「それ、どの辺りにあるの」

「フィリピンと同じ緯度で、フィリピンから数百キロ離れた所にある島々で成り立っている小さな国さ」

修はスマホで地図を出して説明した。島の光景も見せた。

「感じのよさそうな所ね。『パラダイス島でネイルアート』か。なんだか面白そうだね」

妻も、どうやら乗り気になったようだ。

話ほとんど進み、ふたりはパラダイスに住むことに決めた。どこに住むか現地状況を調べにとりあえず、行ってみることにした。

パラダイスの空港に降り立った。三角屋根のロビーを出ると南国の太陽が照り付ける。しかし、風もあり思ったほど暑くはない。観光が盛んらしく、日本人、それに韓国人の観光客の姿も目立つ。ふたりはレンタカーでホテルに向かった。

運転しながら修は妻に話しかけた。

「降りる寸前に飛行機の窓から見ると、島がたくさん見えただろう」

「そうね、島が海にたくさん、浮かんでたわね」

「島は無人島が多い。それも売りに出ているものも多いそうだ。手頃なのがあれば買ってみるか」

修は大儲けをしたから、話が大きくなる。

「夢があつていいわね。そこにロッジなんか建てて休みに行って泊まるとか」「それにジャングル探検なんかしてね」

ふたりはパラダイスがすっかり気に入ったようであった。

それから数ヶ月、移住手続きも完了した。美沙もネイルサロンの出店許可をとり、観光客の多い地区に店舗兼住宅となる不動産を購入し、生活を始めた。

修は朝からパソコンに向かい仕事だ。日本との時差もないので働きやすい。不安だった通信環境も問題はない。一階のネイルサロンを営する美沙は昼には住居となっている二階に上がって食事を作り、夫婦で食卓を囲む。職住近接の暮らした。ネットで無人島も手に入れ、モーターボートも購入した。

「今度の土日に、買った島を探検しようよ」

「お弁当、作ってピクニックね」

「モーターボートも買ったからね」

島に向かった二人はその自然に圧倒された。どこから入っているのか、島は一面、樹木に覆われている。しかも、見上げるような断崖で簡単には登っていきそうにない。モーターボートで海岸を回っていると洞窟の入口があった。

「あの、洞窟に入ってみるか」

「そうね。入ってみようよ」

探検部にいたふたりは洞窟の探索には慣れていている。引き返す時に出口が分からなくなるので、ナイロンロープをリックサクから取り出して、入口近くの大きな石にしっかりと結わえ付け、巻いたロープをほきながら、懐中電灯の明かりを頼りに奥へと進んでいった。登り勾配になっている。だんだん傾斜も大きくなっているようだ。

コウモリなどはいないようだ。どれくらい行っただろうか、水が流れる音が聞こえてきた。その音がだんだん大きくなってくる。さらに進むと大きな部屋になっているところに出た。ここでは洞窟の片側は小川のようになっていて、水は別の洞窟に流れ込んでいる。水の流れ込む洞窟の入口には台のようなものがある。その上には土で出来た人形のようなものが置かれている。

「変なものがあるな」

「この洞窟に来た誰かが置いていったんじゃない」

その部屋を過ぎて進む。洞窟は途中で大きく右に曲っている。そこを曲がると、先に出口が見え、だんだん明るくなってきた。洞窟を出ると、平な土地で開けている。木もなく整地されているようにも見える。

「どうなっているんだ。ジャングルじゃなかったのか」

「不思議ね。人が住んでるのかしら」

「いや、無人島と聞いて買ったよ」

突然、どこからか叫び声が聞こえてきた。周りから、顔を赤や白で塗りたくり、ボロをまとったなものかが、ふたりのほうに向かってやってきた。最初の人には見えなかったが、よく見ると人間だ。数人がふたりを取り囲んだ。

そのなかの一人がなにか言っているが言葉が分からない。どうも、ふたりを非難しているようだ。尖った石を棒の先にくくり付けた槍、石槍だろう、を持

っている者もいる。ふたりは映画のロケシーンに迷い込んだのかと、一瞬錯覚した。ここはおとなしくしているしかない。彼らはふたりの服装をじろじろ見ている。修は美沙の手を取り、振り向き、さつき出てきた洞窟の出口のほうに引き返そうとした。しかし、いつのまにか、出口の両側には石槍を持った男たちが立っている。近づくのと攻撃するぞ、という構えである。

なんのことか分からない。ふたりは顔を見合わせ、不安な顔をした。

どうもついて来いと促しているようだ。背中を押すものもいる。攻撃されるような気配はなさそうなので一応、ホットした。ついていくしかない。なにやらしゃべっているが、修達にはさっぱりわからない。この島にずっと住んでいる原住民たちではないかと思うしかなかった。

彼らをパラダイス族と呼ぶことにしよう。その言葉はパラダイス語としておこう。今後は読者に分かるようにパラダイス語を我々の言葉に訳して伝えることにする。

そのなかのひとりが言った。

「武器は持ってなさそうで、怪しい者でもないようだが、とにかく、巫女様に見てもらってどうするか決めてもらおうではないか」

平地を少し歩くと木の茂みに入った、うっそうとした森林、いやジャングルだ。  
4

ジャングルを抜けると、大きな建物が見えた。巾二十メートル、奥行き十五メートルくらいか、大きな六本の柱で支えられている。壁はなく屋根は椰子の葉でふいてある。梯子がついていて二メートルほどの高さのところに床がある。その建物の前まで連れていかれた。

やがて、貝殻で出来た首飾りをした派手な赤い服を着た女が、建物の床から梯子を使って降りてきた。すると、そこに居た人たちはその女に向かって頭を下げた。

そのなかの一人が女に言った。

「洞窟の扉を開けましたところ、この者どもが洞窟から出てきたのです」

女は彼らに言った。

「今日はニナイとワナイの葬儀の日じゃ。そこにいるふたりはニナイとワナイの生まれ変わりかもしれんぞ」

ニナイとワナイと言うのは新婚の夫婦で食べ物にあたったのか、突然ふたりとも亡くなったのだった。この日はふたりの葬儀が行われることになっていた。

パラダイス族は死ぬと海の神が迎えに来るといふ言い伝えを信じている。洞

窟は海に通じる道で、亡骸は洞窟にある水の流れに入れて葬るしきたりとなっている。水葬だ。いつもは固く閉ざしてある洞窟の扉が開かれたのだ。死者が間違つて村に彷徨つて出て来ないようにするため葬儀のあと洞窟は閉ざされる。たまたま扉を開けた時に、修と美沙はパラダイス族の社会に来てしまったのだった。

修は思った。この女は村で一番偉いのだろう。敵意を持っているようでもなさそうだ。逆らわないことだ。

女は美沙の指先をじつと見ている。爪にはネイルアートが施してある。店の宣伝にもなるので、最新の流行のネイルアートを自分の爪に施しているのである。各指の爪に描かれた模様は人の顔のようにも見える。

傍にいた者が女に声をかけた。

「巫女様、この者の爪の模様はちよつと変わってますね。顔のように見えますね」

「そうじゃ、儂たちの爪に描くものとはちよつと違つておるぞ。この女は不思議な力を持っているのかも知れん。爪の絵は魔除けじゃろうか」

「魔除けですか」

「神に訊いてみよう」

女は建物にある梯子に向かって歩き、修と美沙に自分の後について梯子を登つてくるように手ぶりで示した。他の者も後をついてきた。

床に上がり、周りを見渡すと、この建物を取り囲むように椰子の葉で覆われた家がたくさん見えた。百軒以上あるうか。

修は学校の教科書で見た竪穴式住居によく似ていると思った。立っていると女が床に上ると座るように促した。登つてきた者たちも、修たちの後ろに座つた。

女は土偶が飾られた神棚らしき台の前に座り、祈祷している。その後ろにいる修は神社の神殿にいるような錯覚に襲われた。女は祈祷のあとに目を閉じて瞑想にふけていた。やがて口を開いた。

「『この女に儂の爪に同じ文様を描いてもらえ。それは幸運を呼ぶものだ』との神のお告げじゃ」

女は美沙の手をとり、手を開かせて自分の爪と美沙の爪を交互に指さした。

その動作を見て美沙は自分と同じようにネイルアートを施して欲しいのだなど理解した。

控えている男に女が命令した。

「イナエ、爪の顔料を持って来るのじゃ。塗る小さな刷毛もじゃ」

男は席を立ち、梯子を降りていった。やがて、木の器に入った赤、青、黄色などの水で溶いた顔料と動物の毛で作った小さな刷毛を持ってきて、女と美沙の間に置いた。それはいつも使っているエナメルとは違い、泥のようなものだった。しかし色彩は鮮やかだ。美沙はうまくいくかどうかどうか心配だった。

差し出した女の手を台座に置いて、爪に丁寧に描いていった。そこはプロである。周りのものは食い入るように美沙の手元を見つめた。終わるとその出来上りに女も満足しているようであった。

女は立ち上がり、座っている者たちを見回しながら言った。

「ふたりには村に居てもらうことにする。ニナイとワナイの服があったらう。それをふたりには着てもらおうのじゃ。家も建ててやるのじゃ。出来上がるまでは、サガミ、ふたりにはお前の家に住んでもらう」

「分かりました。さっそく、このふたりを私の家に連れいき、家を建てるよう指示します」

修は声をあげた男のほうに目がいった。やや年配の男だ。身なりも他の者とやや違うので、この村ではあの女の次に偉いのもかもしれないと思った。

女は皆に向かって言った。

「ニナイとワナイの葬儀を行うので、皆、洞窟の前に集まれ。サガミもふたりを家に案内した後から来るんじゃ」

男は修たちに梯子を下りるように促した。手には二着のガウンのようなものを持っている。それは木の繊維を編んだものでゴワゴワしているように見えた。

連れて行かれたのは並んでいる家のなかでもやや大きい家だった。入口の椰子の葉で作った筵をめくって入った。

中は地上から五十センチほど掘り込んである。真ん中には火を焚いたのだから灰が見られる。その周りには土器がいくつも散らばっている。部屋は長方形で、四隅から柱が中央に向かって斜めに立てかけてあり、壁は椰子の葉で覆われていた。屋根の中央は天窗のようになっていて光が差し込むので意外に明るい。

男は隅から椰子の葉で作ったカーテンを取り出して、部屋に仕切りをして、その一郭に入るように促した。持っていた服を渡し、それに着替えるように手ぶりで示した。

修は尿意を催したので外に出て用を足そうとした。

それを見た男は慌てて、制して、修と美沙と一緒に来いという手ぶりをした。連れて行かれた先は巾二十センチ、深さ三十センチほどの溝が掘ってあるところだった。傍らに平たい石に蔓で結わえて棒を取り付けたものが置いてある。スコップのつもりだろう。その溝で用を足せと言っているようだ。用が済んだ場所に男はスコップを使って溝に土をかける仕種をした。そこがトイレであると分かった。

男は家を出ていった。洞窟では葬儀の準備が始まっていた。遺体は椰子の葉で編んだ敷物に寝かされて洞窟の前にあつた。女がやってきた。遺体の前でないやら唱えている。洞窟に入れるのは女の指定する者に限られている。女は祈棒をしながら、洞窟に入る者の頭に液体をかけてまわる。それは椰子の実から作った酒だ。洞窟は神聖な場所である前にお清めがいるという考えだ。死者の体には貝殻で作った飾りを載せる。お清めを受けた者たちは、遺体を担ぎ、女とともに松明を持って洞窟に入っていた。他の者は洞窟の前で胸に両手を置き、目をつぶって頭をさげて見送る。女たちは洞窟の大きな部屋の水の流れの前まで来て、女が祈りを捧げるなか、彼らは遺体を水の流れに入れた。葬儀が終わると洞窟は固く閉じられた。

その頃、男の家に残された修は妻に言った。

「驚いたなあ。こんな原始的ところがまだあつたなんて。こりや、人間のガラパゴス島だよ」

「小学校の社会科見学で復元した縄文時代の家に行ったことがあつたけど、ちようどこんな感じだったわ」

「タイムスリップだよ。しかし、見学だけでたくさんだ」

「ここから出るには助けがいるわ。携帯をかけて見ようよ。この島だって、そんなに離れているわけではないわ。通じるはずだよ」

リュックサックから、スマホを取り出して電話をかけて見た。耳にずっと押し当てていたが、ふたりの顔がだんだん曇ってきた。通じないのである。メールやラインもだめだ。

「だめだわ。通じないわ。私たちはこの島から出られないの。助けも求められないじゃない」

「心配するな。機会を見て逃げ出そう」

「私たちが出てきた洞窟の出口、見張りがいたじゃない。どうやって戻るの」  
美沙は心細そうにため息交じりに言った。

「ここは島なんだ、とにかく海岸に出ることを考えればなんとかなるさ。貝殻を装飾品にしていたのを見ただろう。彼らも海岸にでる術を知っているってことだ」

「大丈夫かしら。心配だわ」

「大丈夫だよ。美沙の爪のネイルアートが魔術を持っているように受け取ったんじゃないか。それで丁寧な態度になったんじゃないか」

「私の仕事も役にたったという訳ね。あの女の人の爪にもなにか塗ったような跡があったわ。爪に何か塗るという習慣があるのかしら」

「本で読んだことがあるが、古代エジプトのミイラにマニキュアをした者がいたそうだ」

リュックサックにあった弁当を食べ終わった後、先ほど男から受け取った服を見ながら、美沙は言った。

「この服に着替えると言うのね」

「そうらしいな」

「ゴワゴワしていて着心地悪そうね」

「逆らわないほうがいいだろう。ちよつとの間だけだ。我慢するしかないよ」

美沙は不服そうだったが、しぶしぶ着替えて、着てきた服をリュックサックに押し込んだ。修もそれにならって着替えた。

「これからの食事、どうするの。もう食べるもの、なにもないわ」

「奴らがどこからか持ってきてくれるだろう。奴らと一緒にするのは食べないといいこともないだろう」

「相変わらず、呑気なこと言うわね」

「口に合わなかったらどうしよう」

「腹が減れば何でも食べるものさ」

葬儀から戻ってきた後、先ほど家に修たちを案内した男は皆を集めて言った。

「ふたりのために家を作る」

ひとりの男が不服そうに訊いた。

「彼らも手伝うんでしょね」

「当然だ。あの男には椰子の葉を集めてもらおう。後はいつもの分担だ」

と男は答えた。ここは平等社会だ。巫女でさえ、他の女たちと同じように畑



を耕したり、調理をしたりする。

家は長くは持たないので頻繁に建て替える。それは男の仕事、総出で行う。家作りは分業制になっている。道具は石の鍬、カギ型になった木の枝に平たい石を研いで先を尖らせたものを蔓で棒に結わいたものだ。石の斧、これも同じような構造だ。石包丁なども使う。道具類の作製と修理をする者も決まっている。柱にする木を伐り出してくる者、壁になる椰子の葉を取ってくる者、葉を編んで大きなシート状にする者、なかを掘り下げる者。家を組み立てる者、皆で協力しあう。どの家も一世帯家族用で、広さは二、三十平米であり一週間ほどで完成する。

男が持つてきてくれた石皿に入れた粥状のものと、魚の焼いたもの食べる。美沙は不満そうだったが、修は意外にいけると思った。

食事が終わると夜の帳が降りてきた。漆黒の闇のなかで、なにもすることが出来ない。天井にあいた窓から星を見る。こんなにじっくりと星を見るようなことはこれまでではなかった。修は思った。

「人間は数千年以上、こういう生活を続けてきたのだ。夜も昼のように明るくして活動するようになったのは最近の事だ。これが人間の本当の姿かもしれない」

思いもしない体験をして疲れたのか美沙の寝息が聞こえる。カーテンの向うから男の寝息も聞こえる。それを聞いていた修もいつのまにか寝入ってしまった。

翌朝、先に起きた男は美沙を女たちの集まっている所に連れて行った。女たちは石皿でヤムイモをすりおろしている。男は石皿とヤムイモを美沙に渡し、手ぶりでヤムイモをすれと促した。隣の女のすりおろすのを見て真似をしてやってみると意外にうまくいった。美沙にネイルアートさせた女も同じようにヤムイモをすりおろしている。

女たちはすり終わると、大きな土器のあるところに行つて中から粉をひとつまみ取つて、芋に注ぐ。美沙も真似した。粉をなめてみると塩の味がした。

美沙はヤムイモを二皿に盛り分けて持ち帰った。

「どこに行っていたの」

「朝食の準備よ。朝食の用意は女の仕事らしいわ。この村は皆、平等ね。昨日、ネイルアートをしてあげた女の人も皆と同じように食事の用意をしていたわ」

と言いながら、持ち帰ったヤムイモの入った石皿と木のスプーンを修の前に置いた。

「なんだこれは」

「ヤムイモよ。パラダイス島のスーパーでよく見かけるものと同じだわ」

「彼らも俺たちと同じものを食ってるのか」

修は一口、含んでいった

「塩味もきいて、意外に食べられるな」

食事が終わった頃、男は家の隅から石包丁と葛籠を持ってきて修に渡し、ついて来いというそぶりをした。他の男もついてきた。ジャングルを突き進み、椰子の木がたくさんあるところまで来た。木は人の背丈ほどの高さだ。男たちは石包丁で葉を器用に摘み取り、葛籠に入れていく。男は修に同じようにやれと手ぶりで示した。見様見真似で作業を始めた。葛籠が一杯になると村まで運ぶ。それを三回繰り返すともう昼近くだ。

帰ると男たちが蔦で長方形の形に区切った枠のなかを掘っている。修は家を建てているのだと思った。修は毎日同じ仕事をした。

一方、美沙はどうかという稲の穂先を石包丁で摘み、叩いて脱穀して、ごみを取る仕事をやった。慣れない仕事なので二人とも体の節々が痛い。美沙は時々、女の爪の手入れもしなければならなかった。逃げ出すために出てきた洞窟に早く行きたかったが、疲れて探索する元気もなかった。

数日後のこと。村にまた死者が出た。女は修と美沙はこの村の一員と見なし、ているので葬儀にも参列させようと思った。

ふたりが連れて行かれたのはあの洞窟の出口だった。ここから出てきたのは随分、前のように感じるがわずか数日前のことだ。女の祈禱を受け、頭に酒をかけられた男たちが遺体を担いで洞窟に入っていた。遺体は小さく子どものようだ。この村は多産多死で五才まで育つのも簡単なことではなかった。

他の者たちは、洞窟の入口で待っている。やがて、女たちが洞窟から出てきた。洞窟から皆が出た後に、大勢の男たちが掛け声とともに大きな石を転がしてきて入口に蓋をするように置くと女はその前で祈禱をした。

修はある本で読んだ古代人の風習の話を思い出した。

「海の神が死者を迎えにくる。神は死者を海に連れていき、ある期間を過ぎると死者の魂を山の神に渡す。渡された山の神が魂を天国に送り届ける。これが

山を崇拜する信仰の始まりだ。その形態は神話として世界各地に残っている」

修は仕事に慣れてくるとどう島から脱出しようかと思案するようになった。葬式がある時には洞窟の扉は開いている。しかし、男たちが洞窟の入口で見張っている。隙をついて洞窟に逃げ込むことは不可能だ。また、蓋となっている大きな石を美沙とふたりだけの力で取り除くことはとても無理だ。

身につけている貝殻はあの洞窟を通って海岸に出て捨てているだろう。その隙を狙えば、逃げられると思っていた。しかし、葬儀の模様からすると彼らはあの洞窟は神聖なものを見なしているようだ。そんな神聖な洞窟を貝殻拾いにくくするために使うようなことはあるだろうかと考えた。でも、海岸に出ていることは間違いない。魚もちよくちよく食べるが川魚のようだ。海の魚はないとすると頻繁には海岸に降りてないようでもある。この島はテーブル状でどこに出ても崖が少なくとも三十メートル以上は切り立っていて簡単には降りられそうにない。

とすれば、海岸に出れる他の洞窟を探すのだ。次に考えられるのはロープを伝って降りる方法だ。ロープは蔦を探して作ればいい。その夜、美沙に相談してみることにした。

「島からの脱出作戦を考えている」

「私もあの洞窟の入口に辿りつけばなんとかかなると思っていたけど、今日の葬式を見てがっかりだわ。あの洞窟は葬式の時だけしか開かないのかしら」

「残念ながらそうみたいだね。たまたま、葬式があつて蓋が開いた時に、俺たちがこのこと出てきたってわけだ。ついてないよ」

「どうやってこの島から出るの。飛行機でも飛んでないかと毎日、空を見上げているがそんな気配はないし」

「飛行機が飛んでいても高すぎて、手なんか振ったところで気付いてくれないだろう」

「じゃどうするの。あの洞窟も使えないのなら」

「彼らは貝殻を持っているだろう。だから海岸には降りているはずだ」

「あの洞窟を使ったと思うわ」

「俺にはそうは思えない」

修はこう言って、本で読んだ古代の風習のことを話した。

「そうか、他に海岸に出る方法があるってこと」

「ふたつの可能性が考えられる。ひとつは、他にも海に出られる洞窟があり、

それを使つていないかということだ。もうひとつは蔦を使つて長いロープを作り、それで崖を上り下りするやり方だ」

「他の洞窟、簡単に見つかるかしら」

「ジャングルが多いなかで洞窟の入口を探し当てるのは至難の業だろう。宝くじに当たるようなものさ。まあ、やつては見るけれど」

「するとロープを使うしかないわけね。蔦はどこで採れるのかしら」

「俺は、椰子の葉の採取をしているが、一人で行動できるようになったので、行き帰りに蔦を探してみる」

「私も手伝いたいけれど無理だね。脱穀のような仕事なので場所を離れられないから」

修は手早く、椰子の葉の採取をやつて村に持ち帰る時に寄り道をして蔦を探し歩いた。

やがて、家が完成した。誰が入るのだろうと思っていると、男は修と美沙を招いて、手ぶりで荷物を持って新しい家に移るよう促した。

その夜からふたりだけのマイホームで過ごすことになった。我慢していた修はさっそく、美沙の体を求めてきた。

「だめよ。島を出るまでは」

「いいだろう」

「いやよ。(赤ちゃんが)出来たらどうするの、脱出なんかできなくなる。それにこんな所で生むなんて絶対にいやよ」

「それもそうだな。脱出まで我慢するしかないか」

「早く、人間らしい生活がしたいわ」

美沙はそう言つて、修に背中を見せて、早くも寝てしまった。

修はひとり考えた。

「人間らしい生活か、それってなんだろう。ここは熱帯なので食べ物豊富だ。戦争もないし、喧嘩や犯罪もない。人の持ち物を盗んだりはしない。最初はリックサックを盗まれないか、心配だったが、杞憂だった。彼らには所有権という概念がないのかもしれない。格差もない。皆、同じように働いている。地球温暖化とも無縁、ゼロ・エミッションの世界だ。そうは言つても、便利なことに慣れてしまった現代の人間はもうこんな生活に戻れないのも事実である」

男が石槍と葛籠を持って訪ねてきた。それを修に渡して、自分の肩にあてて

ある野ウサギかなんかの毛皮を指した。修について来いという手ぶり、狩猟に行くのだろう。彼も石槍と葛籠を持っている。蒐探しの絶好のチャンスだ。まず、歩いた歩数とリュックサクに入れて持ってきた磁石を使って方角を知って紙に書きこむ。そうすれば迷子にならないし、あとで探しあてた場所が分かる。大学の探検部でよくやったことだから慣れている。

その日はむなしく過ぎた。収獲もない。帰ると誰かがイノシシを獲ってきていた。獲れた動物は山の神からの贈り物だと思われる。獲物はあの女のいる場所に持っていく。女はそれを祭壇に捧げて山の神への感謝のお祈りをする。その後、解体され、村人に平等に分けられる。狩猟した者も皆と同じ分量だけをもらう。狩りは効率が悪く、めったに獲れるものでない。修たちもそれを口にするには少なかつた。食糧は主として稗、粟の穀物、自生するヤムイモ、それに川で採れる小魚だった。縄文時代、男は狩猟、女は山菜採りと仕事を分担していると考えられているようだが、この村では女のほうがよく働く。女は山菜採りやヤムイモ掘りだけでなく、稲、あわなどの収穫、脱穀、それに料理も女の仕事だ。男の仕事は非効率な狩り、魚釣りとか家を建てること、道具や土器作りぐらいのようだ。

修は、ついに蒐が群生している場所を見つけた。修は美沙に朗報を告げた。

「蒐のたくさんあるところを見つけた。刈り取って崖の近くに隠すんだ」

「それを繋げてロープにするのね」

「そうだ」

狩猟に行くふりをして蒐の群生地に行き、石斧で蒐を切って崖近くに運んだ。獲物が獲れなくても誰も怪しまない。

脱出決行の前日の事である。

「いよいよ、明日だな」

「そうね。この島の人と言葉が通じなくてお話することは出来なかつたけど、接して楽しかったわ。皆、いい人ばかりで」

美沙は島の生活を思い出しながら言った。

「俺もそう思うけれど。この生活を続けることは俺たちには無理というものだよ」

ふたりは早朝に家を発った。持ち物は洞窟から出るときに持っていたリュックサクだけだ。崖の上まで来ると、着ていた服を脱ぎ捨てて、島に来た時の着てきたものに着替えた。

隠しておいた蔦でロープを作って美沙を降ろした。次に修が降りてきた。なんということだろう、あと数メートルで海岸に達するところまで降りた時、ロープが切れた。修は転落した。見上げていた美沙もとっさに避けようとしたが、落ちてきた修に当たり、ふたりとも頭を強く打って気を失った。そして、わずかばかりの中の砂地に倒れた。ふたりとも脳震盪を起したのか一瞬、記憶喪失状態となった。徐々に記憶は蘇ったが、なぜか島に上陸した後の記憶がすっかり抜け落ちてしまったのだった。まず、美沙は不安そうに口を開いた。

「私、変だわ。夢を見ていたのかしら。洞窟に貴方とふたりで入って行ったのまでは覚えてるけど、その先、どうなったのか記憶がないのよ」

「夢じゃないよ。俺も同じだ。モーターボートを大きな石に繋いだところまでは覚えているがそれから先は記憶が飛んでるんだ。どういふことなのか、さっぱり分からないよ」

「ボートを探しましょうよ。早く」

島の周囲を歩いて回った。幸いにもボートはすぐに見付かった。それはそのまま残っていた。ふたりはボートで島を離れた。

修は遠ざかっていく島を見ながらつぶやいた。

「なにか、あの島は気味が悪いね。もう、行きたくないよ。島を売って別のやつを買おうよ」

「私も同じことを考えてたわ」

ふたりの不思議な体験の記憶が戻らない限り、誰もパラダイス族の存在を知ることはない。どちらかの記憶が戻れば、マスコミが島に殺到して、この村も現代文明に巻き込まれ、村人たちの生活は激変するだろう。それが彼らにとつて本当によいことなのかどうかは誰にも分からない。